

書 評

速水 融著『近世農村の歴史人口学的研究』

——信州諏訪地方の宗門改帳分析——

東洋経済新報社, 1973年, B 5判, 228ページ

近代化以前の社会における歴史は、残された記録の性格からいっても、支配階級の歴史にかたよりがちであった。人口の大部分を占める一般庶民の生活の実体は、支配階級の歴史のなかからはなかなか浮びあがってはこない。生まれてから死ぬまで、すべての人が経験しなければならない生活の基本的な行動は人口学的な諸指標と密接に結びついていると考えられる。その意味で、いつの時代でも人口の大部分を構成し、しかも記録を残すことの少なかった一般庶民の生活の集合としての人口に関する情報を注意深く読みとることによって、歴史を再構築することの重要性が改めて認識されなければならない。

第2次世界大戦後、フランス国立人口学研究所に端を発し、西ヨーロッパ各地区を経て国際的に確立された歴史人口学は、まだ若い学問分野であるにもかかわらず、近代統計成立以前の人口についての諸指標を獲得することを可能にした。その基本的な史料は、ヨーロッパではたとえば教区簿冊 (Parish Register)、日本では宗門改帳などが用いられるが、そのためには、まず史料の発掘・解読およびソース・クリティークが必要であり、それらの手続きを経てはじめて統計処理にたえるようにデータが整理され数量化されるのである。これらの作業は地味でしかもねばり強い不断の努力の連続であることは想像に難くない。本書も筆者を中心とする多くの学徒の協同研究の集大成であり、学際科学としての歴史人口学の確立に偉大な貢献をした意義ははかりしれない。

本書は、旧信濃国諏訪郡（現在の長野県岡谷市、諏訪市、茅野市および諏訪郡に相当する領域）に残る宗門改帳を用いて、近世農民の人口学的諸指標の検出を目的としたものである。第1部「諏訪郡の歴史人口学的観察」および第2部「横内村の歴史人口学的観察」によって構成される。横内村は諏訪郡を構成する村の1つであるが、資料の残存度が高く長期にわたる時系列的史料によって、人口学的分析をより精密に行うことができる。

史料として用いられた宗門改帳は、もともと徳川幕府の宗教政策によって生まれたもので、戸籍簿として制定されたものではない。しかし、これが事実上戸籍簿としての意義をもつ——とくに一般庶民の——ようになったことはよく知られている。またこれに類する史料、たとえば人別家数改帳類、人数増減帳、過去帳なども、歴史人口学の研究にとって有用である。これらに記されたぼう大な記述の中から、何が事実で何が事実でないかを見きわめる冷静な眼をもたなくてはならない。宗門改帳は本来は戸籍ではなかったのであるから、本書においても基本的な事実の検証が積み重ねられている。

諏訪郡の人口は、高い増加率から長い停滞の時代を経て再び人口の増大期を迎えて近代に連続している。この背後には人口の増加が出生率の増大（すなわち有配偶率の上昇）と死亡率（とくに幼児の）の低下という2つの力によって合成されており、この事実は所得の増大——生活水準の上昇——就業構造の変化によって裏づけられている。その結果世帯規模の縮小が明瞭に示されている。この過程は、戦後の核家族志向の方向をほうふつとさせ、人間の営みは今も昔も変わらないという印象を強くさせる。史料による人口学的諸指標の検出という目的からはまわり道のようなではあるが、農業経営の構造変化についての概説があれば、この間の事情がもっと説得力をもつと考えるのは欲目にすぎるだろうか。

最後に「家族復元 Family Reconstitution」に関する今後の展開が、人口学的諸指標の検出を通して、近世のライフ・サイクルを明らかにすることを大いに期待したい。

(中野 英子)